

「装飾ある社会」の彼方

— 永井荷風『地獄の花』のジェンダー論的読解 —

鬼頭 七美

一 はじめに

「はじめて読んだ昔から、『地獄の花』は私にはどうも馴染みにくい小説だった⁽¹⁾」と菅野昭正は述べる。これに対して、論者自身は、はじめて読んだときから非常に面白く惹きつけられた。このような読後感の二分化は、恐らく発表当初から今日に至るまで続いていると思われるが、なぜ、このような事態が生ずるのか。

永井荷風の『地獄の花』は、一九〇二年九月に金港堂より出版された。出版のいきさつについては、金港堂が雑誌「文芸界」を創刊するに際して懸賞募集を行い、これに応じた荷風作品は入選こそしなかったものの、刊行されることになったというものである。一等入選により華々しくデビューを果たした、とはいかなかったところに、この小説の評価の割れたことがうかがわれる。

刊行直後も、例えば、高山樗牛が的確に指摘しているように「太陽」一九〇二・一一）、「近刊の多くの小説の中で、永井荷

風の地獄の花は健かに出色の文字であらう」と評価しながらも、小説中の「一種の主張」について「世上の凡庸作家に往々見る所の如く、唯是の主張を發揮するに急なるが為に、他方に於て人物事件の上に有害なる拘束を加へたるの弊が現はる、に至つては、甚だ好ましくならぬ事と云はなければならぬ」と難点をも指摘している。樗牛はこの難点について、「一面に於ては能く自然主義の旗幟を打立つると共に、他面に於ては又能く理想主義の幔帳を掲げ得たのである。我輩は荷風君が是の事を一考せむことを希望するものである」と述べ、この小説が「自然主義」的傾向と「理想主義」的傾向とに分裂していることを指摘している。しかし樗牛によれば、この両者は共存できるはずだから「一考」を促すと言っているのである。

平尾不孤もまた「作者がニイチエ、ゴルキイの悪潮流に棹しながら、進んで美はしきものを求めんとする思想の傾向あることを世に教へたるを悦ぶ。而して尚ほ人間の両面を捉へて一面獸的本能を写すと共に、他面的本能あることを認めたることを多とす」と述べ、「獸的本能」と「美的本能」とに分裂していることを指摘している（『文芸界』一九〇二・一〇）。

その後の研究史については、木戸雄一⁽²⁾が端的にまとめているように、「従来「ゾライズム」の代表作とされてきたため、主にゾラ受容の分析を中心に論じられてきた」面が多分にある。それに対し、藤森清⁽³⁾が『地獄の花』は「前期自然主義という明らかに事後的な文学史的枠組みによる従来の見方に異議申し立

てをした上で、一般的に文学史的枠組みの外側に位置すると見なされる「通俗小説としての家庭小説や悲惨小説」との近しさを指摘したことを受けて、木戸雄一がその近しさについて、具体的に同時代言説を参照、整理しながら検証したことは、研究史のなかで異彩を放っている。また、武藤史子⁽⁴⁾は如上の流れを踏まえた上で、当時の〈家庭〉を取り巻く言説のなかでこの作品を読み直すことを試みている。

このような、「自然主義」的傾向／「理想主義」的傾向、「獸的本能」／「美的本能」、前期自然主義的要素／通俗小説的要素など（ほかにもゾライズム／ニーチェイズム、社会／理想、等々）といった二極分化した評価の割れ方は、小説内部の論理のどこに重点を置くかによって分かれるものであろう。

しかし、『地獄の花』は、これまでのところ全くと言っていいほど、小説の精緻な読解がなされていない。それどころか、小説の外部の情報である〈ゾラ受容〉に焦点が絞られすぎた結果、誤読さえ招いていると見られる。

そこで、本稿では、小説本文を丁寧に読み解いた上で、これまでの研究史において足りなかったジェンダー論の視座から、この小説の持つ魅力をあぶり出すことを目的とする。そして、これまでの二極分化してしまう評価の割れ方が、ジェンダー論的視座の欠如によるヒロインへの理解不足に起因していることを明らかにしたい。

二 黒淵家が排斥される理由

『地獄の花』の本文については、野村喬⁽⁵⁾が詳細を報告しているように、初版本・流布本（中央公論社版荷風全集第一巻所載）・岩波文庫版それぞれの間で異同があり、このうち、初版本と流布本との間では、看過することのできない大きな異同がある。

この異同をめぐっては、すでに吉田精一が「初版本の方が観念的な説明が多く、あとの方は感傷的な調子をおさへようとして無用の詞句を削つてゐる」と簡単にではあるが指摘していた⁽⁶⁾。このような評価軸は、小杉昭⁽⁷⁾や、網野義紘⁽⁸⁾へと受け継がれて、おそらくは冒頭で紹介した菅野昭正による感覚的な拒絶にも連なるものと思われる。

しかしながら、野村喬が見るところでは、初版本には「観念的」「感傷的」と片づける以上のものが其処にあつて、流布本には「重要な部分の削除がある」。すなわち、「黒淵家の主人長義と夫人縞子との関係は、縞子から情交を迫った事を明かにしてあ」つたり、「若い荷風独特の社会批判」が至るところに溢れているなど、初版本には「現行流布本の極めて平板な調子に比べれば数等の立ち優つたもの」があるのであり、本稿では、この野村喬の見解に即して、初版本を考察の対象として論じていく。

先の「観念的」「感傷的」といったような否定的評言は、社会

批判や結末部におけるヒロイン園子の決意表明などについて、地に足のつかない浮薄な理想主義を見出す故になされたものであるが、まずは、このような否定的言辭が繰り広げられる際の本文の紹介・要約に目を向けてみたい。

例えば、吉田精一は黒淵長義を「成り上りの富豪」と断じ、小杉昭もまた「黒淵家の主人長義を社会の粹外へ追いやつたのも功利慾、名譽慾の強烈さ故の不道德行為がさせたもの」と評する。すなわち黒淵長義が社会から排斥されバッシングに遭うのは自業自得だと言うかのである。

しかし、小説本文を子細に読めば、黒淵長義が社会から排斥されるのは、必ずしも自業自得とは言えないという事態が見えてくる。すなわち、(第二)で、園子が黒淵家の長男でまだ幼い秀男の家庭教師に雇われることになった際、語り手は「是と云ふ確かな風説もないのであるが」と断りを入れながら、「兎に角其の主人と云ふのは余程以前の事、西洋人の妾に姦通して、其西洋人の財産をば妾の手を経て横取りしたと云ふのが重なる噂さで。其かあらぬか、黒淵家は巨万の財産とこの大きな邸宅とを有つて居るに係らず、全く社会へは顔出しも出来ぬ程排斥されて居るのは事実である」と説明していたのである。

家庭教師を引き受けるに当たって、この噂の真相を見極めようという好奇心を抱いた園子は、女学校の教師を続けながら、住み込みで家庭教師をも務めるようになる。そして、黒淵家の財産をめぐる黒い噂の真相を知ることとなる。(第三)で、黒淵

長義が以前にある宣教師の通弁をしていた折り、その宣教師が「偶然にも東京の自宅で病死して了つた時」、その宣教師の「外妾」が「意外なる巨額の財産を受次ぐ事ができ」、「そして其の次には、其の通弁であつた黒淵と結婚の式が上げられた」と真相が語られる。すなわち、黒淵長義の現在の莫大な財産は、「偶然」手に入つたものであり、後ろ指を指されるところは何もないはずなのである。

しかし、この経緯に関する語り手の説明には、若干の揺れが見られる。それというのも、「黒淵家の財産は正しく公明なる手段によつて作られたものでは無かつた」人の妾と結婚する其は明らかに罪である」「黒淵家の財産は云ふまでもなく、卑しむべきものではある」というように、語り手は、あたかもこれが「公明さに欠ける財産」であるかのような印象を与える語り方をするのである。黒淵家が排斥されるいきさつについても、「其当時設立された或る毒筆を以て名ある一新聞の紙上には逸早く、この一家の大秘密を暴露すると称する猛烈な記事が掲げられ」、「是が為めに黒淵一家は忽ち世間一般の後指さるゝ、中心となり、「以来、こゝに二十年余、黒淵家の悪名は今も猶社会に喧伝されて、其の余勢は其の子孫にまで及ぼされて居る」という説明がなされている。

ここで重要なことは、このような語り手による説明が、園子の目を通して知りえた事実に即しているということである。だからこそ、このあとに園子は「黒淵家の犯した罪に対して社会

が蒙らした其の罰は果して能く相当して居るものであるだらうか。と云ふ事に思及^ふことになる。「法律に触れた罪過をも其俤に見逃して置く寛大な社会は何故に独り厳酷にこの黒淵家の^{なごゆえ}みを罰したのであらう」と社会の矛盾や不公平に、園子はこゝで気づいていくのである。

とすれば、揺れのある語りと見えた、黒淵家の財産をめぐる語り手の説明は、実は園子の価値判断に寄り添ったものだったことになる。

さらに、縞子と結婚することになった約二〇年前を回顧する〈第十六〉で長義は、宣教師の妾であった縞子が「其の身の不幸をかこちながら、怪しい関係を自分との間に迫った事、其から其の宣教師が死亡した後、其の遺言通りに驚く程巨額なる財産(略)を譲受けたお縞の望みに従って、聊か安からぬ心地のしながら、遂に結婚をした事」などを思い出す。つまり、長義と縞子との関係は、宣教師が生きている間に縞子が迫ったとは言え、黒淵との結婚も財産入手もあくまで宣教師の死後であり、必ずしも後ろ暗いところがあるとは言えないのである。ここに示されているのは、財産家が死んだあとに、その財産を譲り受けた未亡人である女性と結婚し経済的に得をしたことについての若干の居心地の悪さといったことに留まるのではないだろうか。

このように〈第二〉に示された「噂」に対し、〈第三〉の語りと、〈第十六〉における長義自身の回想とを付き合わせてみると、長義が後ろ指をさされ、社会から排斥されるに価する明瞭

なる「罪」はどこにもない。従って、黒淵長義の境遇を自業自得であるかのように見なす先行研究の評言は、テクストを丁寧に読解していたものだとは言いがたい。それは、テクストの表層において見出される、新聞等での黒淵長義へのパッシングを鵜呑みにした読解にすぎないと言えるだろう。

このような黒淵長義に対する社会的な排斥は、ヒロイン園子が長義自身の善良さと向き合う一連のプロットのなかで捉えられるべきものである。つまり、読み取られるべきであるのは、ヒロイン園子が外側の評判と実際の人物との落差を思い知り、社会の矛盾や不公平に気づいていく一連の展開に他ならない。

三 「装飾」と「動物性」

黒淵長義について真つ当な読解がなされていないことに加え、テクスト全体のプロットが紹介される際に、しばしば見受けられる偏りについても批判的検討が必要である。

従来、このテクストに対する評価の主軸をなしてきたのは「教育家の裏面や、偽善の仮面をはぎ、跋文に於て彼のうたつたやうに暴行や乱倫の生活を暴かうとしてゐる。」⁹⁾といった文言に代表されるように、作者による跋文に沿った読解であった。その結果、ヒロイン園子と同じ女学校に勤めながらも園子を強姦してしまう水沢校長の性暴力や、園子が思いを寄せるクリスマスチャン笹村による黒淵夫人との不義密通といったプロットには

かり目が向けられてきた。だが、すでに確認してきたように、この小説の基調をなすのは専ら園子に焦点を絞って語られる園子の物語である。園子が結末において苦難を乗り越え新たに生きる決意表明をするという物語の大団円を念頭に置かならば、「教育家の裏面や、偽善の仮面」よりもまず先に、その主要な展開をこそ紹介・要約すべきではなからうか。

ここで改めて『地獄の花』の跋文を確認しておく、その内容は以下のようなものであった。

人類の一面は確かに動物的たるをまぬがれざるなり。此れ其の組織せらるゝ、肉体の生理的誘惑によるとなさんか。將た動物より進化し来れる祖先の遺伝となさんか。そはともあれ、人類は自ら其の習慣と情実とによりて宗教と道徳を形造るに及び、久しく修養を経たる現在の生活においては此の暗面を全く罪惡として名付るに至れり。斯く定められたる事情の上に此の暗黒なる動物性は猶如何なる進行をなさんとするか。若し其れ完全なる理想の人生を形造らんとせば、余は先づ此の暗面に向かつて特別なる研究を為さざる可からずと信ずるなり。そは実に、正義の光を得んとする法庭に於て、必ず犯罪の証跡と其の顛末とを、好んで精査するの必要あるに等しからずや。されば余は専ら、祖先の遺伝と境遇に伴ふ暗黒なる幾多の欲情、腕力、暴行等の事情を憚りなく活写せんと欲す。(略)

ここで述べられている「暗黒なる動物性」が『地獄の花』本文において明確に示されているのは、まさしく水沢校長が園子を強姦する(第十八)の場面における次のような語りであろう。

人は裝飾ある社会から全く隔離する時、忽然荒き動物に立返る事が出来る。人は如何に修養さるゝとも、其の心の底の或る部分には、必ず野蛮なる残忍の性情の幾分かを残して居るものである、(略)

ここで述べる「荒き動物」のような「野蛮な残忍の性情」が跋文における「暗黒なる動物性」を指すものであるが、ここで注目したいのは、これらの「野蛮な」「動物」性と対置されているのが「裝飾ある社会」とされている点である。この「社会」については、このあとに続けて次のように説明されている。

種々なる衣着ぎせられ、種々なる帯にて縛られたる社会にあつてこそ、婦人の権力は始めて男を其の足下に降伏せしめ得る。操と云ふものが無上の光榮を放つのである。

すなわち、園子という女性の「権力」(尊厳とも社会性とも言い換えられるものと考えられるが、ここでは「操」と言い換えられている)は、「種々なる衣着せられ、種々なる帯にて縛られ

たる社会」、「装飾ある社会」のなかでこそ意味を持つものであるとされる。人間と動物を隔てるものは衣服だという認識を、語り手は示しているのである。

ここで想起したいのは、冒頭で園子がどのような人物として登場していたかということである。(第二)において、園子は向島の川端を秀男の手を引いて散策しているとき、水沢校長と遭遇し、女子教育論を論じながら同行する。その際、園子は「今の婦人の教育家が衣服をはじめ凡て婦人の装飾と云ふものを、一も二もなく奢侈おごりだとして甚く攻撃します結果は、一般の女生徒が質粗と云ふよりは無造作な風を好くやうになつた」と言つて嘆き、夫への「内助たすけ」や「円満な家庭」のために、着飾ることは「婦人が世に対する任務」だと主張していた。そして、別際には水沢校長に向かつて「丁寧せまな而して又充分愛らしい持前の愛嬌を溢たえて挨拶を済ま」せるのである。

この園子の発言と振る舞いは、女教師という存在が帯びる矛盾そのものを体現している。教師としては男性と対等の位置にありながら、この「装飾ある社会」にあつては、男性への媚態を含む(装飾)を自らに施さずにはいられないのである。実際、園子はこのとき、水沢校長に媚態を示したことにより、あとになつてその身の衣服を剥ぎ取られ、社会性をも奪われたのである。その意味で、園子が強姦されたことは、いわば二重に(装飾)を剥奪され、貶められたことになる。

従つて、結末部における園子の決意を「観念的」「感傷的」と

いうような一言で片づけることはできない。それは、男女の社会的権力差に対してあまりに無配慮な態度と言うべきだろう。

ここで、園子の結末部における決意とはいかなるものであつたのかを検討したい。園子が水沢校長に強姦されたあとには、黒淵長義と縞子の夫妻が心中してしまふ。秀男の家庭教師として住み込みで世話になつていた園子にとつて、黒淵夫妻の心中は、その身に受けた強姦とともに、大きな衝撃を与える出来事であつた。「装飾ある社会」から徹底的に排斥されバツシングを受け続けた黒淵長義による妻との無理心中と、自分自身のあらゆる(装飾)を剥奪され社会的・心理的な死に追いやられた園子。この二つの社会的抹殺を契機として、園子は(第二十)の最後の末尾で次のような決意を表明する。

あゝ！ 実に、人は此の自由自在なる全く動物と同じき境涯にあつて、而して、能く美しき徳を修め得てこそ、始めて不変不朽なる賛美の冠を、其の頭上に頂かしむる価値を生ずるのである！ 否、始めて人たる名称を許るさるゝのである！！

園点が施されたこの箇所は、発表当時から「抽象名詞羅列したるが如き」(「早稲田文学」一九〇二・一一)ものと批判されていた。だが、この箇所こそ、先に引用した水沢校長が園子を強姦する場面での語り(跋文のゾライズムと対応している部分)

と対応関係をなしている部分であり、かつ、跋文におけるゾライズムについての荷風の理解を小説という虚構のなかのロジックとして示しえた部分ではないだろうか。

この〈第二十〉では、水沢校長が園子のもとを訪れ、自らの強姦行為について懺悔するとともに、女学校でこれまで通り勤務できるように、園子の社会的地位や名誉の保証を誓う。それに対して園子の口を突いて出たのが先の決意表明である。社会的体面を取り繕うことはばかり考え、自分の「動物」性に蓋をして見ないようにしている校長に対し、園子は、自分が「動物と同じ境界線にあ」ることから目をそらさないようにと言う。強姦という出来事を通して、自分の身体が「動物」性を持つことを思い知らされた園子は、その「動物」性から目を背けることはできないと言いつつ。そして、その上で、「能く美しき徳を修め得」るとき「人たる名称を許るさ」れるのだと言う。人間の「動物」性を見つめ、引き受けてこそ、はじめて人間と呼べるのだと言っていると言えるだろう。

社会的な立場の回復ばかりを願った黒淵長義が心中に追い込まれたのに対し、園子は社会的・心理的な死を余儀なくされながらも、このあとと生き続ける。自らを傷つけた水沢校長の前に白絹の喪服姿で立ち現れる園子は、これまでの半生を葬り去り、虚飾と欺瞞に満ちた「装飾ある社会」と訣別し、一切の装飾のない衣服によって生きる決意表明をしたのである。

しかしながら、ここで述べられる「徳」なるものの内実は明

らかにはされていない。水沢校長に向かって「約束いたしましたものとも、今は結婚いたす事の出来ない身になったので御座ます」と話した園子が、最末尾において笹村の下へと馬車を走らせ、笹村の悔悟を期待するところで物語は終焉を迎える。笹村の悔悟を導く行いが、園子の考える「徳」であるのかもしれないが、それはテキスト内では明示されない。

とはいえ、このような園子の決意表明の文言こそは、『地獄の花』跋文で「若し其れ完全なる理想の人生を形造らんとせば、余は先づ此の暗面に向つて特別なる研究を為さざる可からず」と述べられていた「完全なる理想の人生」を描いたものと言いうる。跋文は、全体の調子として〈第十八〉における水沢校長の動物性を描写する語りに近い言葉遣いに終始しており、いわゆるゾライズムを宣言するものとも取れる。しかし、〈装飾〉の施された社会と、それを剥ぎ取られた「動物」性という、対照的な物差しを提示するだけで終わることなく、この両者を止揚し「動物」性を超えた人生のあり方を提示してみせた点で、ゾライズム以上のものを視野に入れていたと言いうるのではないか。

この意味で、テキストの結末は跋文で示された枠組みを踏み越えている。テキスト内で黒淵家に対するパッシングのありさまを新聞によるセンセーショナル・ジャーナリズムとして繰り返し描いた『地獄の花』本文に対して、皮肉にも、跋文はゾライズムの流行する同時代状況にあたかも媚びを売るかのように

機能してしまつた。そして、同時代においても、その後の長い研究史においても、跋文の「完全なる理想の人生を形造らん」という一言はないがしろにされ、時代の要請に即したキャラクターなゾライズムの文言ばかりが耳目を引いてきたのである。しかし、テキストを精読するなら、こうした理解がいかに的外れなものでしかなかったのかということに思い至らざるをえない。

四 家族のオルタナティブ

以上のことを踏まえて、改めてこの小説の批評性がどのようなところにあるのかを検証してみたい。

幾人か登場する女性たちのなかでも、最も興味深く、また魅力的に描かれているのは、黒淵家の長女である富子であろう。園子と同じ二六歳でありながら、未婚の園子とは異なり、すでに結婚と離婚を経験している富子は、社会に背を向けるように向島の別荘で一人暮らしを満喫している人物である。離婚したのは、夫が結婚前から芸者と関係を持ち続け、三つになる男の子まであるということを知ったからであるが、富子はこのような夫の不貞それ自体に対してすぐに離婚を要求したのではなかった。初めは「恐ろしい嫉妬と憤怒と又悲しい種々なる感情の錯乱」(第五)が起こるのみであり、このような反応は、富子がこの時点では、あくまで一夫一婦制を常識とする圏内に

いたことを物語る。ところが、このあと富子は仕返しすることを目指し、同じように外泊を試みて夫を挑発する。これに対して夫は自分のことを棚に上げて「大変に立腹し」、「不貞だとか不義だとか御大層な言草を並べ」という態度を示す。富子が離婚を思い立つのはこのときである。「自分は結婚前から子供まで拵へて置きながら、人が鳥渡ちよいとでも気侷な真似をして見せれば直すくと自分の事は棚に上げて了つて、不貞操も聞いて呆れる」
「全体貞操なんてものは夫婦ともく綺麗であつてこそ保てるもの」といった富子の言い分は単に夫を責めるのみならず、男性にとってばかり都合よくできあがつている結婚制度そのものを批判するものである。

それゆえ、富子の離婚とは、こうした結婚制度をベースにした社会そのものからの離脱を意味する。「自分は只自分」「世間は世間」と割り切つて「富子と云ふ一個ひとの女」として「社会とか家族とか云ふものが在つて初めて必要の起つた道德」なぞ蹴散らかす富子は、離婚によって「裝飾ある社会」からの距離を獲得し、精神の自由と安定を手に入れる。そして、このような富子の生きざまは、確実にヒロイン園子に影響を及ぼしていくのである。

では、園子は具体的にどのような影響を受けていたのであるうか。先述したように、園子は冒頭において、知性を司る女教師という職に就きながら、着飾つて男性に媚態を示し家庭を維持することを女性の務めと考えているような女性であった。こ

のような矛盾は、園子が女学校の教師を務めながら黒淵家の長男の家庭教師をも引き受ける二重性として体现されている。社会と社会から排斥された黒淵家とを行ったり来たりするうちに、(一節で述べたように) 社会の矛盾や不公平さに気づいていくのである。

さらに加えて、園子は「近頃出版された文学書類の品評杯から音楽や演劇なぞの事を頻りに論じ出して」、園子の趣味を問ひ質す富子との会話のなかで、養母に引き取られる以前のことを思い出す(第四)。「日頃音楽が好きで、毎月一度は欠かした事なく園子を連れて観劇に出掛け」るような実家に生まれ、「自然と園子も其の方面には薄からぬ嗜好を持つ様になつた」にもかかわらず、養母の下ではその嗜好を禁じられ、ことに遊びを嫌う教育界に携わるようになってからはなおのこと禁欲的にならざるをえなかつたという自らの来歴を改めて想起させられた園子は、その憤懣を富子に対して口にしながら、教育家や宗家を批判する富子と意気投合するのである。

振り返ってみれば、園子が笹村に惹かれたのも、笹村が「志す処は文学」(第三) というような文学青年だったからである。つまり、園子には本来、文学的素養というハビトウスが刻みつけられており、園子と富子は文化資本を共有していたということになる。

そして、このような経過をたどったところで、(第五) に入つて改めて園子の身体描写が丁寧になされる。実は、このテクス

トにおいては、各人物の初登場場面では必ず、その身体描写がなされていた、ということにここで改めて留意しておきたい。(第一) における水沢も、(第二) における黒淵長義も養母の利根子も、(第三) における黒淵夫人である縞子も、(第四) における富子も、着物の様子や、身長、肌の色、年齢、体格等、微細な身体描写が丁寧になされている。だが、園子のみ物語の開始とともに登場しているにもかかわらず、その身体描写は(第五) に至って初めてなされるのである。このような順序の転倒は、富子と出会って交流を深めたのち、自らの身体性に自覚的になつていくプロセスを物語るようで興味深い。

そもそも「牛乳の様に白い柔い豊艶な頬」などという語り手(ないしは作者) の男性的な視線を物語るかのような言葉遣いも、実は園子が自分のセクシャルな身体性を自覚していくという物語進行のライン上にある。縞子も富子も、園子を見たとき園子に向かって「女教師には惜しい姿であると云つた」というのである。「女教師と云ふやうなものは、畢竟望むやうな結婚も出来ない婦人」というレットテルが貼られる時代にあつて、園子はそうではない容姿の持ち主として登場する。第三者から容姿を誉められることを通して、園子がかつて女学校時代に二人の男性から求婚され(拒絶し) たことを思い出す。男性から欲望される自らの身体性について、園子は、縞子・富子の親子から再認識させられたと言つてよい。

そして、こうした性的身体への自覚によって、園子は「一種

の倦怠した不活発な心の状態」に陥る。「持扱そあつかひ兼ねた不健全な身体からだ」は「埒らちもない空想」——かつての二人の求婚者と結婚していたら、という空想——をもたらず。

さらに、富子の屋敷を訪問すると、富子は「自分の家に来る以上は社会的の六ヶ敷い体面とか品格とか云ふ仮面は全く取除いて貫はねばならぬ、赤裸々に其の云ふべき範圍の外までも話し合ふてこそ愉快は生ずるのである」という主義から、「横よこたはつて小説を読んで」いる姿勢のまま富子を出迎える。こうした富子の放埒な身体を見た園子は、一緒に解放感を味わい、自分の身体をも解放していく。

そしてついに、〈第六〉で富子の屋敷の庭を、園子と富子が散策しながら会話に興じる場面で、二人はシスターフッドとも言うべき親密さを示すように、恋の打ち明け話をし始める。園子は、養母の利根子によって、音楽や演劇の趣味を禁じられただけでなく、男を嫌って寄せ付けない生きざまを押しつけられ、その価値観を擦り込まれていた。そのような園子にとって、富子との関係性は抑圧からの解放を意味する。そして、富子に対して自分がかつて求婚され（拒絶し）た経験を恋愛談として話すことよって、自分自身を解放し、自分のアイデンティティを取り戻していくのである。このような絶妙なタイミンングで、園子の前に現れるのが笹村であった。富子と園子には、社会の規範や束縛から解放されているかいないか（自由な振る舞いが出来るか否か）といった違いがあり、そこには親から受け継い

だ莫大な財産の有無という違いがあるが、このような違いは、明治という時代に女性がどう生きるのかを対照的に描き取っていると言ふことができるだろう。

こうして園子は富子の影響を受けて、自らのセクシャルな身体を解放してゆくが、その行く先は、「少しく品のないやうに見える所」（第七）を「如何にも熱誠の單ひとつたらしく聞かる、言語ことば」によって覆い隠し、「いかにも文学者らしい態度」によって「文学」という記号性を身にまとう笹村との「幾分かの軽率を以て成就せられる」「恋」であった。園子は軽薄な笹村に恋をし、その詩吟に酔いしれ、官能的で感覚的な恋のやりとりのうちに「何時か自分を小説中の人物にして」い、挙げ句の果てには、笹村に外泊を強要されるという事態となる（第十）。そして、辛くもそれを振り切ったあとに露呈するのは、笹村が人妻である縞子との不倫を働くような人物だということだった。

ところで、以上のような園子の成り行きを考えると、見過ごせないのが、園子の養母である利根子の存在である。利根子は「何十年間と云ふもの、女子の華やかな時代を藩主松平家の大奥ひとりみに独身で明し暮た後は、矢張独り身のまゝで、幼少ちひよな時から名筆と呼ばれた近衛流の字体を教授して生活せいかいを立て、居た」（第二）が、「其の常浜の名籍をつぐため」という理由で、姪の園子を十三歳のときに引き取った。つまり、利根子は、常浜という家の存続、家名の存続にこだわりを見せている。家制度の維持・存続とは本来なら家父長である男性に特有の考え方である

う。結婚して嫁ぎ先の家を守るといふのであれば（嫁）の規範としてありうることだが、結婚もしていない利根子が、このような家父長的な考え方を身につけ、しかも男児ではなく女兒を引き取って家を継がせようとしていることは、ある種の屈折を物語っている。だからこそ利根子は、「男と云ふものを殆ど悪魔の如くに云ひなして、決して此れに近寄せなんだ厳しい家庭教育」（第六）を園子に施し、一人で身を立てて自分一人で生きるという女性としての一つの生き方をロールモデルとして示す。そして、教師として女一人で身を立てるといふ生き方の道筋を園子の前に敷いてやるのである。

このような利根子にとつての経済的な基盤は、自分自身で稼ぎ出す金銭しかない。そのため、利根子は「近頃は殊更年の進むに従つて、卑しい金銭上の欲心が著しく増して」いる（第二二）。「年来渴望して居た名誉の地位に昇る事が出来る」と喜んだ「貴族女学校の習字の教員」のポストに就任することに決まつたときも、地位や名誉以上に、経済的基盤が固まるという点を喜んだに違いない。だからこそ、物語の終盤において、黒淵夫妻が心中したことによつて園子のもとに黒淵家の財産の三分の一が譲渡されることが分かると（第十三）、その頃には園子が黒淵家に関わつたことによつて、利根子にとつての名誉の習字の教員ポストが失われそうな情勢であつたにもかかわらず、黙して園子の言うままになる。幕末期の大奥にいた利根子が示す生き方とは、根本的に男および男社会を信用しない態度であり、

筆一本で書の師として生き、女兒を養子に迎え、その女兒にも学問を授けて教員という職に就かせた。利根子は、男に包摂される生き方ではなく、女が家を継いでいく女系家族を実現しようとしているのではないだろうか。おそらく利根子は、園子が婿養子を迎え、あくまで園子に老後の世話をしてもらい、そして園子が女兒を産むことをイメージしていることだろう。

園子、富子という対照的な女性二人の生き方に加え、利根子のような生き方をも含めて、これら三人の女性は、女性が男性原理に貫かれた社会に柔順に従うことなく抵抗しながら、どのように生きることが可能か、ということをめぐる人生選択の有り様を示している。園子は、黒淵長義の遺言によつて、秀男の「慈愛深い母とな」ることを心に刻み（第十九）、養母の利根子についても黒淵長義から託された財産によつて面倒を見ることを伝えていく。おそらく、園子・富子・利根子の三人は、こののち、黒淵の遺産によつて支えられつつ、社会からは一線を画した生き方を模索していくことが予想される。いわば、女三人が手に手を取り合い、秀男を養育しながら、一つのユニットとしての家族―家父長制的な家族像に対するオルタナティブ―を形成していくに違いない。このような未来図は、明治という時代における女性たちによる連帯のあり方を提示していると言つていいのではないだろうか。

五 まとめ

以上のことを踏まえるならば、女性登場人物がかくもそれぞれにユニークな生き方を示す『地獄の花』は、先行研究に言われるような「観念的」で「感傷的」な物語ではありえない。ゾライズムという最新の西洋の知見を巧みに採り入れながら、日本の同時代の文学テクストとしてはラディカルな女性の解放を示しえた稀有な小説として捉え返されてよいのではないだろうか。

そして、冒頭でも述べたテクストの評価の割れ方が、ジェンダー論的な視座に立った読解を行うかどうか、という点に起因していることが、ここに至って明確となったと言えるだろう。すなわち、「自然主義」的傾向／「理想主義」的傾向、「獣的本能」／「美的本能」、前期自然主義的要素／通俗小説的要素、等々といった評価の割れ方は、ヒロインに対して寄り添い、ヒロインを中心とした読解を行うならば、後者の要素が競り上がって見えるのであり、ヒロインよりも男性の性欲を中心に読解するならば、前者の要素が勝って見えるのである。冒頭で紹介したように、同時代評においては、この両者の要素が小説内に同居していることがすでに指摘されていたにもかかわらず、一節において確認したように、研究史上においては、この両者の要素は見落とされ、専ら男性中心主義的な視点によって読解されてきたのである。つまり、この小説の研究史とは男性研究

者たちがいかに男性中心主義的な眼差しのもとに小説を読み解いてきたかの歴史なのである。

同時代のゾライズム受容の文脈と作者による跋文の内容を一度留保し、女性登場人物たちに注目してテクストを丹念に読み返すならば、この小説は決して「観念的」でも「感傷的」でもない。ここに示されているのは、社会の規範に抵抗しながら生きようとする女たちのたくましさを描いた物語に他ならないのだ。

〔付記〕

- ・引用は初版本による。
- ・仮名遣いは旧仮名遣いで、旧字体は新字体に改めた。
- ・ルビは適宜、残した。

注

- (1) 菅野昭正『永井荷風巡歴』(岩波書店、一九九六・九)
- (2) 木戸雄一『地獄の花』の方位感覚―日清戦後の言説の中で―(『国文学研究資料館紀要』第二五号、一九九〇・三)

- (3) 藤森清『明治三十五年・ツーリズムの想像力』(小森陽一・紅野謙介・高橋修編『メディア・表象・イデオロギー―明治三十年代の文化研究―』小澤書店、一九九

- 七・五)
- (4) 武藤史子「永井荷風『地獄の花』にみる社会的要素としての〈家庭〉」(『国文論叢』第四七号、二〇一三・九)
- (5) 野村喬「前期自然主義の一齣―『地獄の花』をめぐって―」(『国語と国文学』一九五五・九)
- (6) 吉田精一『永井荷風』(塙書房、一九五三・一一)。吉田清一は「空想的」とも述べている。
- (7) 小杉昭「地獄の花」の世界」(『日本文芸研究』第一八卷第二号、一九六六・六)
- (8) 網野義紘『荷風文学とその周辺』(翰林書房、一九九三・一〇)
- (9) 吉田精一、前掲書。

きとう なみ (日本文学)

子ども学部発達臨床学科

KIRO Nami : Beyond the "decorative society" : an essay on Nagai Kafu's "Flowers of Hell (*Igoku no hana*)" from a gender perspective